

「ちゅらら」 沖縄発の切り花用カラコエ

一般財団法人 沖縄美ら島財団 総合研究センター 植物研究室 主任

佐藤 裕之

ちゅららシリーズはリュウキュウベンケイという沖縄の在来植物を用いたカラコエです。多肉植物らしく、収穫後水なしでも花が咲き続けるという面白い特性を持つことから、切り花としての普及を目指しています。

実は、リュウキュウベンケイの交配は、三位先生が在任中の植物細胞工学研究室で行われていました。今から10年程前、私が学部生時代に細胞工の温室の中でリュウキュウベンケイの交配種がいっぱい咲いていたのを今でも覚えています。その時は自分が社会人になってこの花を引き継ぐことになるとは夢にも思いませんでした。当時、育種を担当されていたのは泉川康博氏（現 広島市植物公園）で、他の仕事をしながら合間を縫って交配作業をされていました。とても熱心に取り組まれていたので自分も影響されて興味を持ち、先輩にくっついて色々教えてもらいました。

その後、泉川氏が広島に移れるのとはほぼ同時期に、私も修士を卒業して沖縄の財団法人海洋博覧会記念公園管理財団（現 一般財団法人沖縄美ら島財団）に就職しました。幣財団は植物園を管理していることもあり、沖縄県に自生する植物を保全や展示目的で多く所有していました。三位先生と幣財団の花城良廣は古くから親交があったことから、共同で仕事しやすい関係にありました。リュウキュウベンケイもその中で動いていき、交配種となって幣財団に戻ってきたのです。

私が就職した際、リュウキュウベンケイの交配種は‘ちゅらら’‘ちゅららダブル’の名前で品種登録申請中でした。「ちゅら」とは美しいを意味する沖縄言葉で、「ら」を重ねることで音を良くしたと聞いています。実際、‘ちゅらら’はさておき、‘ちゅららダブル’は八重のオレンジ色の花が実に美しかったです。しかし、この時点ではカラーバリエーションがなかったため、少々使いにくい代物でした。そこで、卒業する直前に整理しておいたリュウキュウベンケイ交配種を細胞工から取り寄せ、沖縄で栽培しやすく、草姿が良い個体を新たに5つ選抜し、品種登録することで、

黄色、桃色を加えた3色にしました。

幣財団にとって産業振興は重要なワードであるため、沖縄における産業化を目指して4年前から、ちゅららシリーズの実証栽培試験を始めました。作型開発が十分にできていなかったため、農業試験場や出荷団体、農家に協力してもらいながら進めました。初年度は誰もカラコエを作ったことがないため、キクの作型に準じたところ、茎が2cm近くあるモリモリの収穫物が出来てしまうこともありました。それでも、地元の熱心な農家のおかげで、次の年には品質の高い収穫物を得ることが出来るようになりました。

一方、現在最も問題となっているのは輸送方法です。太田市場に荷着状況を確認しに行ったところ、花首の曲がりや傷みが発生し、見るも無残な姿になっていました。その後、入数を変え、梱包方法を変え、試行錯誤して改善はされたものの、完全な解決には至っていません。現在は育種で解決するほかならないと考え、茎の強度等を選抜基準に加えています。

切り花用カラコエは時を同じくしてデンマークのKnud Jepsen 社からも発売されました。さすがにカラコエの育種で世界をリードしているだけあって品質が高いです。同社の品種とちゅららシリーズでは草姿や出荷時期等が異なるので、できる限り同じ土俵に立たずに攻めていきたいと考えています。また、巻中のもう一つの記事で書かせて頂きましたが、ちゅららシリーズは絶滅危惧種の保全活動の一環で生まれた美しいストーリーがあるため、これを付加価値として差別化できればと考えています。

ちゅららシリーズは未だ発展途上の品目ではありませんが、将来的にはキクやトルコキキョウに次ぐ沖縄の花卉品目になるのを目指して頑張っています。